

令和6年度長崎大学理学療法学同門会 鶴崎俊哉先生退職記念講演に参加して

福岡大学筑紫病院 リハビリテーション部
山本晨平 (保健学科14期生)

令和7年3月1日に鶴崎俊哉先生の退職記念講演が開催されました。また、鶴崎先生のご講演の前には、話題提供として松村海先生、永瀬慎介先生のご講演も開かれました。本報告では、それぞれの先生のご講演の内容を振り返り、私自身が感じたことも踏まえて、退職記念講演の概要を紹介させていただきます。

松村海先生は、鶴崎先生のご指導のもとで運動学的研究に従事されており、今回の退職記念講演では鶴崎先生との思い出エピソードを交えつつ、最近の研究成果についてご講演されました。歩行動作やハーフスクワット動作における関節モーメントを、3次元動作解析装置や床反力計を用いずに推定するという松村先生の研究は、臨床場面においてより安価で簡易的な動作分析を可能にすることを目指しており、臨床への還元が大いに期待される内容となっております。特に、歩行時立脚後期における足関節モーメントに下腿三頭筋の働きが強く関与するという結果は、臨床で多くみられる歩行速度が低下した患者に対して、足関節の可動域や底屈筋へのアプローチの重要性を改めて再認識させられるものでした。

永瀬慎介先生は、長崎百合野病院で小児リハビリテーションに長年従事されており、「地域の病院で小児を診る」というモットーのもと、鶴崎先生とともに小児リハビリテーションの充実に尽力されてきました。

長崎県では小児リハビリ施設の数に限られていることや、そのような施設ではこどもが世間と隔絶された環境にあること、障がいを持つこどもの兄弟姉妹は我慢を強いられやすいことなど、臨床でのさまざまな問題点を指摘されておりました。そしてそれらの問題点の解決に向けて、これまでに長崎百合野病院で取り組まれてきたこと、永瀬先生が心がけているポイントについてご紹介いただきました。ご講演を通して、永瀬先生がいかにこどもと対等の目線に立ち、一緒に悩み、考え、どれほど多くのチャレンジをされてきたのかが伝わってきました。

そして、鶴崎俊哉先生のご講演は「私の理学療法士史」というタイトルのもと、鶴崎先生が理学療法士を志すきっかけとなった出来事など、これまでに語られなかった鶴崎先生ご自身の貴重なエピソードから始まりました。日本で理学療法士という職業があまり認知されていなかった当時、鶴崎先生と現長崎記念病院の山下潤一郎先生が、リハビリテーションの理解を他職種から得るのに非常に苦労されたというエピソードは、私が同じ理学療法士である以上、他人事として聞くことはできませんでした。私たちが今日こうして理学療法士として働くことができているのは、鶴崎先生をはじめとする先人の方々のご尽力の賜物なのだと、改めて考え直すことができました。

また、鶴崎先生の研究テーマの1つであ

る乳幼児のハイハイ動作の研究については、育児相談の際に「こどもがハイハイをしない」という心配の声が保護者から多く寄せられたことがこの研究に着手するきっかけとなったという経緯をお話しされ、常に患者や困っている人の声に耳を傾ける鶴崎先生の理学療法士像に改めて尊敬の念を抱きました。そして、ハイハイ動作の研究を進めるにあたって明らかとなった、運動発達の「多様性」に関する内容も印象的でした。ここで紹介された「多様性」という言葉は単に乳幼児の個人間の多様性を指すだけでなく、個人内の多様性も意味するというものでした。つまり、運動発達においては、乳幼児がたくさんの試行錯誤を経験し、その結果として個人内に多様な引き出しが作られることで、より汎用性に富んだ運動能力が育まれるとのことでした。

鶴崎先生はまた、この多様性という考え方が、乳幼児の発達のみには適用されるのではなく、私たち理学療法士の介入場面においても必要となると言及されました。私たち理学療法士が日常的に実施している動作指導についても「その指導内容がパターン化していないか？」というご指摘を投げかけていただきました。たとえば、患者にある生活動作を指導する際に、ワンパターンだけを受動的に練習させるということは、実は退院後の生活場面における汎用性に乏しく、もしも環境が大きく変われば、その動作は遂行できなくなるかもしれないというご指摘でした。患者自身が自分で考えて試行錯誤を経験することは、患者のADL動作能力をより高めていくのに必要なプロセスであり、さらに、そのような試行錯誤を患者と共有することで、理学療法士としての引き

出しも増え、自身の成長にもつながるのではないかというお話でした。このお話から、たとえリハビリ対象が乳幼児ではなく成人や高齢者であったとしても、常に患者の学習プロセスを意識して介入することが必要であると感じました。

記念講演を通して、こどもの人生と正面から向き合い続ける鶴崎先生の理学療法士としての姿勢に大変感銘を受けました。穏やかで控えめなお人柄からは想像もつかない強い信念を貫き全うされてきた先生の格好良い背中を、多くの人が憧れ追いかけてきたことと思います。ご講演はハイブリット形式で開催されましたが、県外からも多くの同門会員が参列し、オンライン参加者を含めると150名近くが参加することとなりました。これもひとえに鶴崎先生の厚いご人望があつてこそその数字かと思えます。私自身、鶴崎先生の理学療法士としての歴史の一部に触れることができまして、今この上ない幸運を感じております。

改めまして、長崎大学医療技術短期大学の時代から現在に至るまで、同門会員のご指導に尽力くださいました鶴崎俊哉先生に深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、ご多忙の中ご講演いただきました松村先生、永瀬先生、鶴崎先生をはじめ、退職記念講演を企画・開催いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。